
令和8年度 第1回午前（4科目）

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和8年2月1日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生どうしの貸し借りもできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. スマートフォンは、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子の印刷が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は25ページまであります。
8. 問題冊子は持ち帰ってください。

□一 次の——線部のカタカナを漢字になおし、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 道路をカクチヨウする工事が始まる。
- ② 病気の原因をキユウメイする。
- ③ 友人にベンゴを頼む。たの
- ④ 自動車にガソリンをキユウユする。
- ⑤ 町のサッカーチームにシヨゾクしている。
- ⑥ メンミツな計画を立てる。
- ⑦ 新しい建物に消火器をセツチする。
- ⑧ 景色のよいレストランを探す。
- ⑨ 母の恩に報いたい。
- ⑩ サッカー選手が現役を退く。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本では電車が時刻どおりに運行される。

当たり前のように思えるが、これは世界ではとても珍しいことである。

時間どおり運行する日本の技術もさることながら、これには日本人の性格も影響しているだろう。

電車が数分も遅ればアナウンスが流れ、電車の遅延を詫げる。これは、数分の遅れにもいらつく人がいるからなのだ。

山手線などは、数分も待てば次の電車がやってくるのに、それさえ待てずに階段を駆け上がり、駆け込み乗車をする。

「せまい日本、そんなに急いでどこへ行く」という標語が昔あったが、

とにかく日本人は待つことができない。電車が遅れば、駅員に詰め寄り文句を言う人が現れる。

しかし、欧米は違う。

大陸的と言ってしまえばそれまでだが、欧米では電車が多少遅れたくらいでは誰も動じない。いらついているのは日本人くらいのものだ。

とかく日本人はせっかちである。

何もしないということは、日本人には拷問に近い。何週間もバカンスを取れば、多くの日本人は全部予定で埋めてしまうことだろう。

たまに休みをとって旅に出ても、一か所でも多く観光をしようと忙しく各所を巡る。

① どうして日本人はこんなにも「せっかち」なのだろうか。

日本の自然は変化する。② 日本ほど四季の変化の大きい国はない。

日本は大陸の東端にある島国である。そのため大陸の気候と海の気候の両方の影響を受ける。

日本の北側の大陸には冷たくて乾燥したシベリア気団があり、北側の海の上には湿ったオホーツク海気団がある。一方、日本の南側には暖かく乾いた気団があり、南側の海の上には湿った太平洋気団があるのである。

その複雑な気団の影響を受けながら、日本には季節風が吹きつける。冬には大陸から北西の風が吹き、逆に夏には南東の風が吹くのである。この季節風の違いによって、夏には暖かく湿った風が高温多湿の気候を作り、冬には北西の風が日本海側に大雪を降らせ、太平洋側は乾燥した天候になる。そして、冬と夏の間には気団が移り変わり、梅雨前線や秋雨前線を作る。

こうして季節風が変化し気団が移り変わることによって春夏秋冬の変化がはっきりするのである。しかし、季節の変化が大きいということは変化のスピードが速いということでもある。

日本人が待ち焦がれる桜の開花も、瞬く間に満開となり、やがて散ってしまう。お花見を楽しめる期間はほんのわずかなのである。

こうして日本の季節は日々移り変わっていくのである。

季節の移り変わりが激しいばかりか、高温多湿で植物の生育に適した日本では、植物はみるみる成長し、そして朽ちていく。日本人の変化を見る目が鋭敏になったのも当然である。

しかし、変化していくのは優雅な季節の風景だけではない。

日本では、雑草もまた生育が旺盛である。一日一日伸びていき、あっという間に生い茂ってしまう。せつせと取り除かないと、田んぼや畑が征服されてしまう。

今日草取りをしなければ、明日は草が伸びてしまう。一週間もすればぐんぐん伸びて大変なことになる。雑草は待ってくれないのだ。とても悠長に過ごすことはできない。

これでは日本人が「せつかち」になるのも無理はない。

日本人がせっかちなのは、目まぐるしい変化に対応するためであるし、予測不能な変化の中で培われてきた気質でもある。

③それに、雑草もまたせっかちである。

雑草は予測不能な環境に生きる植物である。いつ耕されるかもわからないし、いつ草取りをされるかもわからない。

そのような変化に対応するために多くの雑草が共通して持っている特徴がある。

それは開花までの成長が早いということである。

明日何が起きるかわからない環境では、のんびりじっくり成長している暇はない。一気に成長して花を咲かせて種子を残さなければ、命をつなぐことができないのである。ゆえに雑草は成長が早いのだ。

人間が草取りをすればするほど、より早く花を咲かせる個体が生き残るようになる。つまりは、^④人間が成長の早い雑草を選抜しているようなものだ。

こうして、せっかちな雑草の成長がせっかちな日本人を作り、せっかちな日本人の草取りがさらにせっかちな雑草を発達させていったのである。

⑤松尾芭蕉は「夏草や兵どもが夢の跡」と詠んだ。

日本の雑草は生育が早い。

栄華を誇った都も、やがて雑草が生い茂り、荒れ果てる。人々が血を流した戦場も、雑草が覆い、緑の大地となる。花は咲き、花は散る。草は生い茂り、風景を変貌させていく。

日本の自然は常に変化していく。そして、風景もまた変化していく。二度と同じ時が戻ってくることはない。日本の自然や風景も、眺めていればそのことは肌でわかる。

松尾芭蕉は夏草に、時が移り人の世が変化していくさまを見た。そして、人の世のはかなさを詠んだのである。常に変化していく自然。そんな自然を見たとき、人々は^(注)刹那を感じずにいられない。「今」の大切さを感じずにいられない。

日本人は、豊かな自然の一部を切り取って文化を作り上げたように、変化する時間もまた切り取った。

茶道や華道では季節感を大切にして、季節を先取りした花を飾る。四季の移り変わりを愛し、季節を愛することを尊ぶのである。そして、「一期一会」という瞬間の出会いを大切に、花期が短い桜を愛した。

日本人は変化する不安定さの中に価値を見出してきたのである。

仏教では「諸行無常」と説く。

「諸行無常」とは、「この世に形あるすべてのものは同じ状態を保っていない。不定であり、絶えず変化している」という意味である。

この教えは、日本人にとっては 2 難しい話ではない。自然の中に生きる日本人が日々感じてきたことだったはずである。

日本人は閉鎖的へいさであるとされる。

日本人は小さな島国で二〇〇年以上も鎖国せまを続け、狭いムラ社会の中で先祖伝来の土地を耕し続けてきた。そんな日本人は、変化を好まない民族であると言われる。

現在でも、日本人は保守的だ。自ら動くことはなく、外国から圧力をかけられると、やっと重い腰こしを上げて変えていく。

しかし、日本人は本当に変化を好まないのだろうか。自ら進んで変革を起こすことは少ないかもしれないが、日本は、外から来る変化を進んで受け入れることによって発展を遂げてきた。

日本は有史以来、大陸の文化を受け入れてきた。稲作いなさくも受け入れたし、仏教も儒教じゅきょうも受け入れた。

明治維新いしん以降は、西洋の文化を積極的に取り入れ、近代化を図はかってきた。本書でも西洋と東洋は根本から異なると論じてきた。しかし、日本はその異質な西洋の文化や考え方を大きな混乱なく取り入れて、短期間で西洋風の近代国家を作り上げたのである。

第二次大戦後は、敵国であったはずのアメリカの文化さえ抵抗ていこうなく取り入れていった。

日本人は変化を恐れない。 3 変化を受け入れることによって発展を遂とげてきた国民と言えるだろう。

そして、日本人にとっては身近にある大きな変化がある。

「天災」である。

日本は災害の多い国である。 あ、いつ何が起るかわからない。とてもゆっくりと休んでいる暇はないのだ。

そんな危機感ききかんは日本人をますます「せっかち」にさせたかもしれない。

⑥日本人は生き急いでいると言われるかもしれない。しかし、常に生存の危機に怯えながら、一瞬を大切に生きてきたのである。

しかし、である。

大きな変化である天災が起きたとき、日本人は強さを発揮する。

東日本大震災のときに、日本人はパニックを起こすこともなく、秩序を保ち長い列を作った。

数分の電車の遅れが待てなかった人々が、いざ災害となれば、長い行列を作り、じつと救援物資を待ち続ける。

日本人は一瞬の時間も惜しむが、いざ天災となれば動じない。これが災害大国に住み、災害を乗り越えてきた日本人が培ってきた気質である。

「江戸っ子」は、気が短かったと言われている。江戸は、大雨や地震などの天災以外にも、木造家屋の密集による大火も頻繁に起こった。まさに、何が起るか分からない状況だったのである。

江戸っ子は「宵越しの銭は持たない」と言われるほどの、刹那的な生活を送っていた。

ずいぶん奔放な暮らしにも思えるが、明日になれば災害で何もかもなくなるかもしれないということを考えれば、今日の財産を今日使うことは極めて合理的でもある。まさに昔の人々の知恵とも言えるだろう。こうして日本人は刹那に「今」を大切に生きてきたのである。

しかし、そんな江戸っ子たちが見せる、災害に対する沈着さと、わずか数日で家を建ててしまう復興の早さは、幕末に日本を訪れた西洋人を驚かせた。

日本は災害の多い国である。しかし、それだけ日本人は災害に強い国民でもあるのである。

「変化」は日本人を作り上げてきた重要な要素である。

そんな日本人の姿は、まさに「雑草の生き方」そのものであると私は思う。

日本人は雑草に似ている。そして、雑草は日本人によく似ている。

(稲垣栄洋『雑草と日本人』より)

(注) 刹那……きわめて短い時間。

問1 本文中の空らん 1 3 に当てはまる語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|
| ア | 1 | わずかに | 2 | それほど | 3 | あたかも |
| イ | 1 | まさに | 2 | 決して | 3 | むしろ |
| ウ | 1 | とっさに | 2 | たいへん | 3 | せめて |
| エ | 1 | まったく | 2 | まるで | 3 | もつと |

問2 ——線部①「どうして日本人はこんなにも『せっかち』なのだろうか」とありますが、この問いに対する答えとなる一文として最も適切なものを本文中から見つけ出し、その最初の七文字(句読点はふくまない)を答えなさい。

問3 ——線部②「日本ほど四季の変化の大きい国はない」とありますが、このことについて次の二つの問い(1)(2)に答えなさい。

(1)日本の季節の変化の特徴とくちょうについて筆者の考えはどのようなものですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 季節の変化がゆるやかで、自然の景物をのんびりと楽しむのに適している。
- イ 季節の変化がすみやかで、短い期間でさまざまな自然の変化がおこりやすい。
- ウ 一年を通して気候が安定しており、自然の変化する様子がわかりやすい。
- エ 一年のなかで大きく気候が変化するため、人々に自然を楽しむ習慣がない。

(2) 日本の季節の変化に関連して筆者が述べている内容と合っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本周辺には性質が異なる複数の気団が存在し、その複数の気団が日本にあたる影響は季節によって大きく異なる。そのため気候の状況は季節によって大きく変わってくるのである。

イ 日本は北側の大陸の気団と南側の太平洋上の気団との二つの気団にはさまれたところに位置しており、そのせいで夏と冬とは反対方向の季節風が吹く。この季節風によって梅雨前線や秋雨前線が発生する。

ウ 日本の夏は太平洋側では高温で乾燥した気候になり、日本海側ではやはり高温だが多湿な気候になる。太平洋側と日本海側でのこの違いは、日本周辺にある複数の気団の影響によるものである。

エ 大陸の気候と海の気候の両方の影響を受けることで、日本では冬には北西の季節風が吹き、夏には南東の季節風が吹く。そのせいで、夏には梅雨前線が発生し、冬には秋雨前線が発生する。

問4 — 線部③「それに、雑草もまたせっかちである」とありますが、どうしてそのようになったと筆者は考えていますか。

その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 高温多湿な日本の気候によって、植物の生育に必要な適切な温度と十分な水分を得ることができていたから。

イ 優雅な季節の風景を楽しむもうとする人間から邪魔者扱いされてしまうことを避けるため、早く美しい花を咲かせようとするから。

ウ 常に人間によって取り除かれる危機に瀕しており、のんびりと成長していたのでは種を保存させていくことができなかつたから。

エ 予測不能な環境に置かれている雑草にとって、確実に花を咲かせて種子を残すためには、しっかりと準備する必要があったから。

問5 —線部④「人間が成長の早い雑草を選抜せんばつしているようなものだ」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ちようど草取りが行われる時期に花を咲かせるタイプの雑草は草取りによって実を付けることができなくなってしまうので、人間の活動が雑草の生育環境を破壊はかいすることになっているといふこと。

イ 草取りが行われる前までに花を咲かせて実を付けることができなかつた雑草は子孫を残すことができないので、人間の活動が雑草の成長をおくらせることになっているといふこと。

ウ 草取りが行われる前に花を咲かせて実を付けていた雑草だけが子孫を残すことができるので、人間の活動が子孫を残すことができない雑草を決めることになっているといふこと。

エ 草取りが行われた後の時期に花を咲かせて実を付けるタイプの雑草は草取りによって田畑から排除はいじょされてしまうので、人間の活動が雑草の生育する場所を他に移動させることになっているといふこと。

問6 —線部⑤「松尾芭蕉は『夏草や、兵どもが夢の跡』と詠んだ」とありますが、筆者は、この句に「夏草」を詠みこむことで芭蕉がどのようなことを表現しようとしたと考えられていますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日本の雑草は成長のスピードが早いので、どんなところにもたちまち生い茂り、雑草に覆われた荒れ果てた風景を生み出すことになる。このように風景が変貌していく様子を見て、芭蕉は時間が決して繰り返さないことを思い、「夏草」を詠みこむことによって人間の営みの無常を表現しようとした。

イ 日本の雑草は予測不能な環境に生育するので、どんなところでも強い生命力で生き抜こうとし、人間の生活空間を侵略することもある。このような雑草の力強さを見て、芭蕉は人間の営みが弱くて短いことを思い、「夏草」を詠みこむことによって雑草の生命力が人間の力を超えていることを表現しようとした。

ウ 日本の雑草は生育が早く、田んぼや畑を征服してしまいかねないので、人間は雑草を敵視して常に取り除こうと努力している。このような雑草と人間との関係を見て、芭蕉は自然に対する人間の傲慢さを思い、「夏草」を詠みこむことによって人間が減じた後の世界を表現しようとした。

エ 日本の雑草は開花までの成長が早いので、人間の活動によって生存を脅かされることがない。このような雑草のしたたかな生存戦略を見て、芭蕉は人間の生き方にも共通する要素がそこにあると思ひ、「夏草」を詠みこむことによって荒れ果てた戦場からふたたび立ち上がるうとする人間の姿を表現しようとした。

問7 文中の空らん あ を補う言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 犬も歩けば棒にあたる

イ 転ばぬ先の杖

ウ 人生山あり谷あり

エ 一寸先は闇

オ 雉も鳴かざれば撃たれまい

問8 ———線部⑥「日本人は生き急いでいる」とありますが、日本人が生き急ぐのはなぜですか。筆者の考えにしたがって三十字以上四十字以内でわかりやすく説明しなさい。ただし、句読点も字数にふくめるものとします。

問9 本文の内容として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は自然の変化を恐れ、安定を求めてきた。
- イ 日本人は自然の変化に価値を見出し、文化や思想に取り入れてきた。
- ウ 日本人は自然の変化を無視して都市化を進めてきた。
- エ 日本人は自然の変化を制御しようと努力してきた。
- オ 日本人は災害に弱く、常に不安を抱えている。
- カ 日本人は自然の変化に順応し、強さと柔軟さを持っている。
- キ 日本人は雑草のように自然を支配しようとしている。
- ク 日本人は変化を避けるために文化を発展させてきた。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の中学生・野々歩のほは、亡なくなった祖母の住んでいた町にやってきました。遺産の後片づけのため、母親がしばらく家を空け、そこにいたためです。以下は、野々歩が、母親がボランティアでかかわる子どもたちと過ごす場面です。

全員が合流したのは、ガケの上から屋根だけ見えていたログハウスだった。入り口に細枝で「注1」コロボックルハウス」と書かれている。

ログハウスのまわりは、森の中にぽっかり空いた大広間みただった。赤や黄、色とりどりの落ち葉のじゅうたんが敷しきつめられている。近くに川があるのか、さらさらとやさしい水音もひびいてくる。

「ここもおばあちゃんの山？」

野々歩の問いに母親は、

「そ。ここにログハウスを建てたいって話がでたとき、おばあちゃん、自由にまわりの木を切っていいから、存分におやんなさいって、ハツパかけたんだって。①もはやコロボックルの伝説よ」とこたえた。

「へえ、かっこいいじゃん、おばあちゃん」

「そういう太Aつ腹Bなところがあつたわね。だけど、好奇心旺盛こうきしんおうせいだから自分が一番わくわくしたんじゃない。建てるとき、しよっちゆう見物に来てたらしいから」

「だれが建てたの？」

「森っちと保護者の人たちみんなだよ」

「すごい」

首にかけたタオルでさかんに汗あせをぬぐいながら、

「こつちにいるとね、自分の知らなかったおばあちゃんにいつばい出会うことになって、ああ、生きてるうちにもつとちやんと向きあえばよかったって、後悔こうかいすることばかりよ」

と、母親は遠い目をして薄日うすびのさしはじめた空を見あげた。気のせいかな、^②その目が少しうるんで見えた。

野々歩の中でも、^③ぼんやりしていたおばあちゃんの輪郭りんかくが少しずつ濃こくなっていく。曲まがった腰こしに手をあてて、うれしそうにログハウスを見あげるおばあちゃん。「存分におやんなさい」と、みんなにハッパをかけるおばあちゃん。

「もつと会いたかったな」

母親と並んで空を見あげながら、野々歩もぼつりとつぶやいた。

「見て、ロンドン橋だよ」

輝てるくんが、枝を直径五十センチほどの穴にわたしてさげんている。

「ロンドン橋わたれ、わたれ、ロンドン橋ー。だれか、わたる人ー？」

歌いながらの勧誘かんゆうに、ひとりの男の子が乗った。

「はーい」

枝の太さはハルくんの腕うでほどだ。見ている野々歩の目の前で、バキン！^④案あんの定ぢやう、枝は折れて、男の子は穴に落っこちてしまった。底に水がたまっていたのか、ズボンもTシャツも泥どろまみれだ。はねた泥のしぶきをあびて、輝くんの顔も水玉もよう。

——うわ、サイアク。

「キヤハツハツハハ」

それなのに、そんなことは気にもせず、ふたりは楽しそうに笑い転げている。野々歩は汚よじれるのは苦手だ。保育園のころも泥だんごづくりに熱中する友だちを、離はなれたところから冷めた目で見ていた。

あたりを見わたすと、落ち葉の散ちり敷しかれた斜面しゃめんを丸太転がしみたいに転がっている子もいれば、木登りをしている子もいる。太い枝からつるされたロープ製のブランコを、天まで届けとばかりにこいでいる女の子もいる。それぞれがそれぞれのやり方で森とたわむれていた。

そのとき、鼻先をけむりのおいがかくすぐった。もくもくと白いけむりがあがっている。見ると、広場の端のブロックのかまどらしきもので森つちが小枝を燃やしていた。

「ごほごほごほ」

けむりに巻かれた野々歩がせきこむと、

「あー、悪い、悪い。けむりで蚊を追っばらってるんだ。これも山生活の知恵」といいつつ、風向きが変わって、今度は森つちがせきこんだ。

「ごほ。今度はこっちか。山にはなんでもあるでしょ。プールなんてなくても、夏になると、その川で水遊びできるし。だけど水がめちやくちや冷たいから、五右衛門ぶろをわかして、ときどきあったまりながら遊ぶんだ」

木の間にごしに川のほとりに置かれた大きなドラム缶がのぞいていた。

無口かと思った森つちだけれど、山の話になると、饒舌だ。話しているうち大きくなった炎の上に五徳らしきものを置き、真っ黒にすすけたフライパンをのせた。そのときだった。

「森つちー、ほらー」

と大きな声でさけびながら男の子が駆けよってきた。にぎっていた手をパツと広げると、三センチほどのサワガニがはいまわっていた。オレンジがかった体は透明でもものすごくきれいだ。

——宝石みたい。

見とれていると、

「どうする？ 食べる？」

と森つち。⑤ とんでもない展開にかたまる野々歩を尻目に、

「食べる！」

男の子は即答して、フライパンにポイントとサワガニを放りこんだ。ジュツ。けむりがでた。

それを森つちが、はしがわりの枝でいりつけると、あたり一面に香ばしいにおいがただよった。カニといっしょに小さな栗もフライパンの上ではねていた。

「さあ、できたぞ」

真まっ赤かにいりあがったカニを、森つちがはしでつまんでさしだすと、男の子はフーフー息をふきかけながらかじりついた。カリツといい音がでた。

「おいしーい！」

男の子の顔がほころぶ。

「な、うまいよな」

「ごくりとつばを飲みこむ野々歩の鼻先に、

「食べてみる？」

と軍手の手がつきだされた。はじけた栗が湯気をあげている。迷わずつまんだ。

「あっち」

あやうく落としそうになってあわてた。炭化した皮をむき、口に入れると、濃厚のうこうな甘みあまが口の中いっぱい広がる。今まで食べていた栗はなんだったんだと思うほどの甘さ！

「おいしーい」

思わずため息がでた。

「だろ」

満足そうに森つちは、こんどは真っ黒にすすけたやかんを火にかけた。

⑥ 森つちって、今まで野々歩が出会ってきたおとなと、まるで肌はだざわりが違ちがう。火の番をしている丸まった背中が森の番人みたいだ。

ログハウス横の大木のブランコでは、さっきの女の子がまだ飽あきず遊あそんでいた。カモシカみたいにバネのきいた体が空へと勢いよくとびだしていく。丸たんぼうをたおしただけの平均台では、両端りょうはしから進すすんだふたりが出会ったところでじゃんけんをして、負けたほうはふりだしにもどるといふ遊びがはじまっていた。

ハルくんは、と目できがすと、女の子たちにまぎっておままごとに興きじていた。

「(注4) オーマイガッ。ノーノー、どんぐりは食べちゃだめですよ」

どうやらエリちゃんがお母さんで、ハルクくんは赤ちゃん役らしい。

そばに立って見ている野々歩に、

「のんのさん、どうじよ」

エリちゃんがフキの葉をさしだした。葉っぱの上には、芯しんだけになった松ぼっくりと、ハルクんからのプレゼントのダンゴムシ。思わずあどずさりしそうになったけれど、

「なにこれ？」

と聞くと、

「エビフライとごはんだよ」

とかえって来た。はぁー、そういうこと。

「ありがとう。いただきます」

息を止めて食べるふりをする野々歩を、エリちゃんほとび色の丸い目でじっと見つめていた。

「ごちそうさま」

葉っぱをかえすと、

「おいしかった？」

と真剣しんけんそのものの表情で聞かれた。

「おいしかったよ」

とこたえると、満足そうにエリちゃんは笑った。両方のほっぺにかわいいえくぼがうかんだ。

朝霧あさぎりの日は晴れるという母親の予報どおり、透明とうめいな光が筋になって林にふりそそいでいた。光を受けた落ち葉のじゅうたんが金色かがやに輝く。

——こんなところがあったなんて知らなかった。

野々歩は両手を広げて空をあおいだ。深く息を吸いこむと、山のしめった空気が肺いっぱいになり、^⑦なぜか目尻に涙がにじんだ。

——なんていい気持ち。

ずっと息をつめて暮らしていた。だれかの視線、だれかのささやき、だれかの吐く息、だれかの悪意。そんなものにばかり神経をとがらせていた。そのうち、どんどん自分の輪郭が薄くなって、透明人間みたいになっちゃうんじゃないかと、怖かった。

ここではみんな自分が主人公だ。思いのまま遊び、思いのまま笑っている。開かれているのだ。心も体も。野々歩は、カタツムリみたいにすぐにひっこんでしまう自分を小さいと感じた。ワンワンワン。

そのとき、大型犬の鳴き声が谷間にこだました。その声を合図に、遊んでいた子どもたちがいっせいに林道の方角に向かって駆けだした。

——え、なに？

薄暗い林道に黄色いワンボックスカーが止まっていた。中から大型犬がとびだしてきて、そのあとから大きな炊飯器をかかえた女の人が、よたよたとおりてくる。バンダナを巻いた頭、ふわりと広がる白いエプロン。

——あ、あの人かきのうお母さんと電話で話してた陽子さんか。

陽子さんも森つちに負けずおとらず、「森の人」という雰囲気を身にまとっていた。

「ソックスー」

ハルくんたちは犬のもとに駆けよってじゃれあっている。ソックスとよばれた犬は、黒と茶色のまだらもようで、ふかふかの毛の足先だけ白い。なるほど、それでソックスか。

年長さんたちは、うばいあうように陽子さんの手から炊飯器を受けとると、「よいしょ、よいしょ」とかけ声をかけながら広場めざして運びあげていく。大きな寸胴鍋やアルミ皿もあって、なかなか大変そうだ。だけど、おとなたちはだれも手をかそうとしない。

「陽子さあん、ソックスー、ありがとう」

子どもたちの盛大せいだいな声に送られて、デリバリーを終えた陽子さんとソックスは帰っていった。陽子さんはひらひらと手をふって、ソックスはりっぱなしっぱを風が起こりそうなくらいぶんぶんふって。

子どもたちと並んで手をふっている母親に、

「手伝わなくていいの？」

と聞くと、

「だいじょうぶ。あの子たち慣れてるから」

あっけらかんと、かえされた。

「きょうはイタリアンだね。いいにおい」

こちらにもする気のなさそうなりつpegが並んで立った。

「陽子さんはね、ホテルのシェフだったんだけど、捨て犬だったソックスを拾ったことで、こっちにひっこしてきたの。あんな大きな犬、都会のマンションじゃ飼えないもんね」

「え？ 犬のせいで仕事やめちゃったってことですか」

野々歩の目が丸くなる。

「うん。でもずっと田舎暮いなからしにあこがれてもいたんだって」

「人生って不思議よねえ。なにが(注5)ターニングポイントになるか、わからない」

うーん。そんなこともあるのか。

三人が立ち話をしていいるあいだに、子どもたちの手で着々と「森のレストラン」の準備が整えられていく。のんびりしているのは野々歩とおとなたちだけ。小さなハルくんやエリちゃんもなんらかの仕事を見つけて動きまわっている。

あたり一面にいいにおいがただよった。トマトのすっぱいにおいが食欲を刺激しげきする。あれはきっとミネストローネ。ぐうー。

野々歩のおながが盛大せいだいに鳴った。ふだん朝からこんなに運動することなんてないから、無理もない。

冬はたき火をかこむのか、土のこげたとろろを中心丸太がいくつかごろんと転がされていた。そこが客席らしい。木のテーブルには、ホテルのバイキングみたいにおいしいような料理が並べられていた。

それぞれリュックから取りだした皿とおわんを手に、子どもたちが列をつくる。

「うそ。食器がいるの？」

「ちゃんと、あなたの分も持ってきてます」

母親からアルミの皿とコップをわたされ、ほっとした。よかったあ。この(注)シチュエーションで食べられなかったら泣くよ。

子どもたちは落ち着いたようすで、順に器に自分の食べたいものを食べただけよそっていく。おかわりは自由なんだって。

炊飯器の中身はいろどり豊かなピラフ、寸銅鍋は予想どおりミネストローネスープだった。おまけにアルミ皿では大好物のマカロニグラタンが湯気をあげている。うわー、どれもおいしそう！ しかもポリューム満点。それにしても、おとな四人と子どもたちだけでこんなにたくさん食べられる？

心配は無用だった。食欲全開の子どもたちはおかわりをくりかえし、負けじとおとなたちも列に並んだ。食の細くなっていた野々歩も、近ごろではめずらしくたくさん食べた。

三十分もしないうちに、どの容器もきれいに空っぽになった。名残惜し(注)そうに輝くんはスプーンでガシガシ、グラタンのこげつきをかきとっている。

「はっは。あんな姿見たら、陽子さんよろこぶね」

「あの子のお皿、カッコいいよね」

さつきからずっと輝くんの木のお皿が気になっていた。うきあがったしまの木目がカッコいい。

「輝くんのパパさんは木工職人だからね。ここ数年、智頭町(注)には移住してくる若い人が増えて、エリちゃんのパパはニュージーランドから来たアーティストだし、あやめちゃんのご両親は天然酵母(注)をつかってパンを焼いている。それから翔くん(注)ちは養蜂家(注)。みんな森の可能性にかけてるんだよね」

ゆりっぺが教えてくれた。

「わたしの若いころは、なんにもない田舎がいやでいやで、はやくここをでたいって、それしか考えてなかったけど、変われば変わるもんね」

水筒片手の母親は、^⑧考えこむようすでまなざしを遠くの山へと向けた。青い山の稜線がくつきりとした線を描いていた。

——森の可能性！ なんだかわくわくする。

「お母さん、なんでもっとおばあちゃんちに連れてきてくれなかったのよ」
損をした気分になった野々歩は、思いきり、くちびるをとがらせた。

「え？」

ふいをつかれたように野々歩をかえりみた母親は、

「ほんとうにねえ。……でも今からでも遅くないんじゃない？ たびたび来ればいいよ」
とやわらかな笑顔を向けてきた。

(八束澄子『森と、母と、わたしの一週間』より)

(注1) コロボックル……アイヌの伝承に登場する小人。

(注2) 饒舌……口数が多いこと。また、そのさま。おしゃべり。

(注3) 五徳……炭火などの上に据えて、鍋などをのせる、三本脚の輪形の台。

(注4) オーマイガッ……英語の「Oh my God」(オー・マイ・ゴッド)がなまった言葉で、「なんてことだ」といった驚きや強い感情を表す。

(注5) ターニングポイント……転換点。

(注6) シチュエーション……状態。状況。場面。

問1 ―線部A「太っ腹なところ」・―線部B「こうきしんおうせい好奇心旺盛」・―線部C「案の定」の意味として最も適切なものをそれぞれ後から選び、記号で答えなさい。

A 「太っ腹なところ」

ア お金に細かく、節約するところ

イ 他人に対して心が広く、気前がよいところ

ウ 怒りおこっぽく、すぐに感情的になるところ

エ 自分に自信を持って行動するところ

B 「好奇心旺盛」

ア 何事にも興味を持ち、積極的に知ろうとする気持ちがさかんな様子

イ 他人を気にすることなく、自分の意見を強く押し通おす様子

ウ 一つの考えにこだわらず、新しいものを進んで求める様子

エ 一度決めたら決して迷うことなく一気につき進む様子

C 「案の定」

ア 当然のことながら

イ 勢いよく

ウ あっという間に

エ 予想したとおり

問2 —線部①「もはやコロボックルの伝説よ」とありますが、母親がこのような言ったのはどうしてですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おばあちゃんが昔話をよく語っていたから。

イ おばあちゃんが森に住んでいたことを伝えたかったから。

ウ おばあちゃんの行動が大胆で印象的だったから。

エ おばあちゃんが山で不思議な体験をしたから。

問3 —線部②「その目が少しうるんで見えた」とありますが、このときの母親の心情の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母との関係を考えさせられる発言を自分のむすめから受けて落ち込んでいます。

イ 野々歩に母のことを話せて安心している。

ウ ログハウスを建てたときのことを楽しく思い出している。

エ 母のことを懐かしく思いながら悔やんでいる。

問4 —線部③「ぼんやりしていたおばあちゃんの輪郭が少しずつ濃くなっていく」とありますが、どういうことですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あまり会う機会のなかったおばあちゃんの顔を、はっきりと頭の中で思い出せるようになったということ。

イ 今までは全く縁がなかったおばあちゃんに、わずかながら親しみが持てるようになったということ。

ウ これまであまり話したことがなかったおばあちゃんとの、わずかな思い出がよみがえってきたということ。

エ 今まで知らなかったおばあちゃんの性格や生き方を理解し、存在を身近に感じるようになったということ。

問5 —線部④「山にはなんでもあるでしょ」とありますが、この言葉に込められた「森っち」の気持ちの説明として最も

適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 山の生活には不便や苦勞がつきものだときらめる気持ち。

イ 山の生活の豊かさや楽しさを自分のことのように誇らしく思う気持ち。

ウ 山の生活が常に危険となり合わせであることを警告したい気持ち。

エ 山の生活のすばらしさを知らない都会の子に対する軽蔑の気持ち。

問6 —線部⑤「とんでもない展開にかたまる野々歩を尻目に」とありますが、どういうことですか。その説明として最も

適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア サワガニが毒をもっているのではと心配している野々歩を少し気にしながら、ということ。

イ サワガニを今まで食べたことがなかったのでおどろいている野々歩には関心がないふりをして、ということ。

ウ サワガニを食べるなんて想像もしていなかったためあつげにとられている野々歩を気にも留めないで、ということ。

エ サワガニを料理するのはむずかしいだろうと思っっている野々歩を全く無視して、ということ。

問7 — 線部⑥ 「森つちつて、今まで野々歩が出会ってきたおとなと、まるで肌ざわりが違ちがう」とありますが、ここでの

「肌ざわりが違ちがう」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選えび、記号で答こたえなさい。

ア 山での生活についてとても詳くわしく知しっていて山での生活を心から楽しんでるように見えた点てんが、野々歩にはいままで経験けんしたことのないほど新鮮しんせんだったということ。

イ 今までに味わったことのないようなおいしさで野々歩くに粟くを食べさせてあげられるほど料理が上手な点てんが、野々歩には全く意外いだったということ。

ウ 男の子の気持ちしゅんじを瞬時しゅんじに察ししてサワガニをフライパンで焼いてあげることができるほど小さい子どもあつかの扱あつかいが上手な点てんが、野々歩には好すましく感かんじられたということ。

エ 火の番ばんをしている森の番人ばんにんのようで、山の生活についてはとても詳しいけれど山の話以外いについては無口むくちな点てんが、野々歩には不愛想ふあいさうで親おやしみにくく感かんじられたということ。

問8 — 線部⑦ 「なぜか目尻めじりに涙なみだがにじんだ」とありますが、それはなぜですか。この時の野々歩の心情を四十字以上六十字以内でわかりやすく説明しやうめいしなさい。ただし、句読点くよつてんも字数じすうにふくめるものとします。

問9 —線部⑧「考えこむようすでまなざしを遠くの山へと向けた」とありますが、この時の野々歩の母親の気持ちはどの

ようなものですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 以前はきらいだったふるさとの町が若い人たちの移住してくる魅力的な町みりよくに変わってきたことと、町のその魅力に気持ち
ちが引き寄せられている自分自身の考え方の変化に、しみじみと感動している。

イ 森の可能性を信じて自分のふるさとの町に移住して来てくれる若い人たちに対する感謝の思いと、かつてあんなに自分
のふるさとの町をきらっていた自分への反省とで、胸がいっぱいになっている。

ウ 今は魅力的な町になろうとしている自分のふるさとなのに、何にもない田舎だと思って今までめったにむすめを連れて
こなかったことへの反省で、ともしずんだ気持ちになっている。

エ ふるさとの町で魅力的な生活を送っていた昔の人々の自然とともに生きていた暮らしを思い浮かべて、今ではもうそれ
が不可能になってしまったことを悲しみ、感慨かんがいにふけている。

